

現代神道研究の内外人の離合

——神道の真友 故ポンスンビ博士——

文学博士 加藤玄智先生述

(遺稿)

日本の親友、神道の愛好者、生涯をその研究にかけた英人故ポンスンビ博士(本尊美)は、昭和十二年十二月十日、天父のお召しにあって昇天された。其人の業績の一コマだ。故人は京都に永住して一生独身。日本人と同様に日本家屋に住み、米食を嗜み、和服姿でズット通された特志者であった。私も長いお付き合い故、物故される時、末期の水を取った一人であった。以下佐藤氏の書簡にも諸所見える通り、ポ翁の神道又は神社信仰に対する結論は、明治政府が一切の宗教圏外に立った国家的儀礼とのみ法律的に取扱ったのに対し、ポ翁は全く宗教学の研究結果と同調して、是を宗教であると断言された。故に翁の論文“The Vicissitudes of Shinto”は一度は英国の学界で、ずっと以前に発表されたけれども、日本では延び延びになって今日に至った。翁の選集第五巻のタイトルは右の論文の題名に因んで名づけられた。佐藤氏の書簡で明らか通り、翁と佐藤氏とは単なる師弟関係ではなく、真の親子関係の如きものが生じて居り、基督教の所謂父子の心情を以って結合され、遂に道德的關係より宗教的關係が能く見える。其の關係は文明教期の宗教段階にまで発達した仏基二教の高位置に上っていることを私は看取する。

時恰も私は約二十年前頃、東京の乃木神社が旅順に於ける日本の一将校乃木大將を祭神として祀った神社という

ころから、占領治下の総司令官マッカーサー元帥より継子扱いの白眼を以て視られ、高山宮司も困らされたのである。其時私は義侠心又は正義感から、感奮して、乃木神社成立の真精神を英文で簡明に述べ、同社は至誠教とでも名づくべき乃木聖雄を崇拜する一文明教期の宗教であることを明らかにした。其結果私は其原英文書が日本訳なしに今日まで立到ったことを惜しみ、其和訳版を公刊しようと試みたとき、偶々私は何が故にそんなことに思付いたかと反省すると、直ちに私の心に浮んだことは、私に対する聖雄信仰の至誠教から来て居ることを直感した。否、至誠そのものの人間的性格者其のものが私をして、ギリシヤ語のエンテオス神人一如者たらしむるに至ったという結論を直感せしめた。是全く佐藤氏とポ翁との神人一如観と神縁深きものを信じて、茲に以下佐藤氏より私への書簡を抜抄して読者の参考供し、道德と宗教との善隣関係を再建し、教育界にも其清涼剤の力を頒ちたく思つて、私は本論文を提供するのである。

前略 昭和三十八年十二月十九日附の御尊書は大いなる感激のうちに拝読いたしました。

さて、私は過去一年の間（本尊美博士著作選集）第五卷 “The Vicissitudes of Shinto” の刊行のためにのみ全力をそそいで参りました

ため、先生へのお便りなども必要の最少限度にとどめまして、本当に失礼のみ仕りました。何卒御諒承たまわり度う存じます。明年度（三十九年）に於いて最終第六巻を出し了るまでは、馬車馬のようにただまっしぐら

（本尊美博士著作選集）

に、前を向いて走るだけで御座います。第六巻を完成して始めて私は、ポ先生に対する海よりも深く山よりも高い御恩に報いることが出来ます。私は疾うに三十五年前、此の世を去って居りました。ポ先生の御温情のみかげにて、私はポ先生よりも二十六年も outline して居ることが出来たので御座居ます。ポ先生によって助けられたこの命は、ポ先生のためにささげなければならぬと、自分の生命のある限り、ポ先生の日本研究の業績の顕彰のために尽さねばならないと、ポ先生が昭和十二年十二月十日御永眠せられたその瞬間から、心に誓ったので御

座います。そして、この事業を始めてから来年で丁度十年に相成ります。いかなる苦勞も、何とも思いませんでした。ポ先生も天上よりこの身を守らせ給いて、私は病氣することもなく、今日まで選集刊行の「*Book*」に従って参りました。これは誇張でも何でも御座いません。ポ先生のみたまは常に私の *Back* に（仰臥している時は）、また起座している時は私の胸に鎮り坐して居られるので御座います。自分はこの信念を抱いて刊行の事業をして居ります。（略中）

第五卷は去る十一日、製本完成と同時に、東京より第一番に加藤先生の許までお送りいたしましたので御座います。それは貴先生には他の誰よりも強く、本巻の完成をお待ちかねていらつしやると忖度せられ、また本巻に對する先生の御感想を他の何れのそれらよりも強くお待ちして居りましたからで御座います。先生にはこの度のお手紙の中にて御述懐あそばされて居りますように、私の苦心について、先生ほど深い御理解をたまわった方は御座いません。それは先生にはポ先生の日本人の友人の中で最も古い親友であらせられ、はたまた同学の士であらせられるからだと確信いたします。私も第五卷のタイトルを決定した瞬間から、本巻の序文 *Foreword* は加藤先生以外には適当な御友人はないと、心にきめて居りましたので御座います。そういう關係にて先生のあの長い（約六千語の）御序文（和文）註一も、あの様な短いそしてあの様な真にふさわしい（英文の）序文に約めることが出来たので御座います。これは心が通じ合っていないなければ出来ないことで御座います。その苦心の存する所が貴先生に御理解いただけまして、これ以上のよろこびは御座いません。先生よりあの様なあたたかいおほめのお言葉を頂きまして、他の千万言の讚辞よりも嬉しう御座います。先生とポ先生との友情の深さ、強さ、親しさ、古さを広く世の人々に知っていただくことが出来まして、こんな嬉しいことは御座いません。

先生には第五卷の第二章（第三十四頁）の題字「御魂及広田神社」が加藤先生の御染筆であることを御記憶で御

座いますか。どうぞ御覧下さいませ。そのほか、先生のお名前（引用のため）が本巻には十三箇所ほど見えます。索引 INDEX の Kato Genchi のところにあります。こんなに幾度も名前の見えるのは先生だけで御座います。私は今日まで賛助金集めと編集のことにのみ、心に向けて居りましたので、以上のことなどお知らせ申し上げたいとまも御座いませんでした。何卒事情御賢察の上、お容るし願ひ度う御座います。今後の仕事といたしましては、一月五日頃より各方面への発送を始め度、それが終り次第第六卷“Visiting Famous Shrines in Japan”刊行の準備に取りかかる予定で御座います。（以下略）

敬具

昭和三十八年十二月二十二日夕

本尊美記念会

代表 佐藤芳二郎

学勞窟研究所内

加藤玄智先生 侍史

神道とは何ぞ

神道惟一道 神道は惟一道

誤聞偏耳禽 誤って聞く偏耳の禽

凡知無力大 凡知無力大なり

鳥告妙溪深 鳥は告ぐ妙溪の深きを

註一 『神道研究紀要』第五輯所収「外人の神道研究家としてのボンソソビ博士」参照。

註二 この英文の序文は、『本尊美博士著作選集』第五巻の冒頭に収録されている。

なお、本稿は昭和三十九年頃、京都の本尊美記念会代表故佐藤芳二郎氏によって、美濃半紙に謄写（孔版）され、学芸館研究所発行となっている。当時、本稿はごく一部の人びとにのみ配布され、広く一般の方々の眼に触れることはなかったと思うので、特に今回、松山謙氏のご厚意と照沼好文氏のご配慮で、ここに掲載させて頂いた。この旨を付記して謝意を表する次第である。（事務局）